



～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.18 2010年9月号

- 「ぜんぶで12ひき」の物語・・・・・・・・・・・・・・・・・・安藤 明伸
- 帽子をかぶる・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博
- 今は無き動物たちに思いを寄せて... ・・・・・・・・・・菅原 淳
- いつまでも一緒にいたいと思うすばらしさを教えてくれるこの一冊・・・・・・後藤 姫奈
- 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博

■ 「ぜんぶで12ひき」の物語

安藤 明伸

「くまのがっこうの くまのこたちは 1, 2, 3, 4.....ぜんぶで 12 ひき。きょうも げんきに くらしています。」で始まるこのお話。「くまのがっこう」シリーズの絵本です。この絵本は、仙台生まれの絵本作家あいはいひろゆきさんの文と、あだちなみさんの可愛らしい絵で、大人でも楽しめるものになっています。私の下の子には、今でも時々寝る前に読んでやることがありますし、小学生の上の子も、今でもこの絵本や、キャラクターが大好きです。このシリーズでは、12 匹のくまの子が主人公です。11 匹が男の子で、一番末っ子にたったひとりの女の子ジャッキーと一緒に住んでいて、様々な出来事を経験します。シリーズで 10 作ほど出ていますが、今回はその 2 作目『ジャッキーのパン屋さん』をご紹介します。



ジャッキーは、一番年下で、いたずらっ子で、意地っ張りで、でもみんなのおねえさん代わり(のつもり)です。『ジャッキーのパン屋さん』は、学校のバザーでパン屋さんを出店するというお話です。12 匹全員で森の木の実を摘んだり、農園から作物を運んだりして、かぼちゃパンを作り始めます。パンを焼くのに 1 時間オープンに入れるのですが・・・待っている間、どうやら 11 匹のお兄さんはみんな寝てしまい、ジャッキーが一人でオープンから取り出したようです。でも、いつものジャッキーのおてんばで、パンが大変なことになってしまいました。もちろんお兄さんたちは怒り出します。意地っ張りなジャッキーは、そのままお店に持っていくのですが・・・。

どのシリーズも、文とイラストの絶妙なバランスで、読む者を楽しませてくれます。

『ジャッキーのパン屋さん』で私が特にお薦めするのは、パンが焼けてオープンから取り出すシーンと、お客さんが並んでいるシーンです。シリーズ化されていることで、良い意味でのパターン化があり、それがリズムにもなっています。冒頭部分の書き始めも同じですが、毎回、お兄さんの名前が明らかになっていきますし、文中で「と おもったら・・・」という表記があると、次に事件が起こることがわかるのも、読む者をワクワクさせてくれます。各巻の最後も同じシーンなのですが、イラストは異なっており、今回はどうなっているのか楽しみになります。

またこれらのシリーズには、家族以外のおとなが一切登場しません。ストーリーの中では、旅行に行ったり、街に行ったりするのですが、登場人物としておとなが登場しないのです。そのため、12 匹の子供たちだけで解決したり、お互いの気持ちをねぎらったりすることが自然と印象に残る作品となっています。

この「くまのがっこう」は、関連する生活雑貨やランチグッズ、キッチングッズなど実用的なものがたくさん出されています。子供たちと、絵本のエピソードを思い出しながら食べるランチは楽しく、美味しいですよ。

絵本を読んだら、こちらのサイトも見てみてください。きっと楽しめますよ。 <http://bears-school.com/>

「ジャッキーのパン屋さん： くまのがっこう」

あいはいひろゆき・文/あだちなみ・絵/ブロンズ新社

(技術教育講座)

■ 帽子をかぶる

藤田 博

桃太郎が「おびしめて たちをはき はちまきしめて」、金太郎が「まさかりもって くまにのり はちまきしめて」、それでは不足とばかりに、「ぼうしをかぶり」となるのは何故でしょうか。かぶった桃太郎に、金太郎に、「あなた いつまで かぶっているの」と声が飛びます。「あなた」というからには奥さん、しかし、桃太郎にも金太郎にも奥さんはいないはず。大向こうからかかるようにしてかかった声なのかもしれません。「おにたいじまで」かぶっている、かぶっていたいその意味は、かぶっていなければ鬼退治ができなかった、かぶっていたからできたということなのではないでしょうか。帽子をかぶるとは、特別な力を与えてくれるものに他ならないからです。

桃太郎に、金太郎に、そして、弁慶に、共通しているのははちまき、そのはちまきの上の帽子です。みほちゃんが犬のしろくんにするはちまき、かぶせる帽子は、真剣そのものの桃太郎、金太郎、弁慶のパロディーといったところでしょうか。みほちゃんにとっても、しろくんにとっても、「いつまでも いつまでも いつまで ずっと」かぶっていたい帽子。帽子とはそういうもの、瀬川康男作・絵『ぼうし』（福音館書店）の描き出す「ぼうし」の世界です。



さのようこ作・絵『わたしのぼうし』（ポプラ社）の「わたし」の帽子は、「すこし ふるくて、すこし よごれていま」す。それだけなじんでいる、だからこそ「わたしの」帽子なのです。デパートで迷子になったとき、お母さんは「わたしの ぼうしを みつけたので、ぼうしを かぶっている わたしもみつけました。」もう一人の自分、分身としての帽子です。汽車の窓から顔を出し、帽子を風に飛ばされてしまったとき、「とんでいったのが おまえでなくて よかったよ。」とお父さんが言います。もう一人の自分、身代わりとしての帽子です。

買ってもらった新しい帽子をお兄さんはすぐかぶります。「わたし」はかぶりません。「それは、わたしの ぼうしのように なかったんですもの。」買い物に行くとき、お母さんが何度も「わたし」に帽子をかぶせます。「わたし」はその度にずらします。「だって、わたしの ぼうしのように なかったんですもの。」その帽子のつばをかじって引っぺがります。歯の痕がつき、こすると黒くなります。そこに蝶が止まります。「なんだか、わたしの ほんとの ぼうしのように でした。」そうした気持ちになったのは、蝶が帽子と「わたし」を一つのものとして認めた、正確には、蝶が認めたと受け止めた、だからこそなのです。

竹下文子作・いせひでこ絵『むぎわらぼうし』（講談社）に描かれるのは、麦わら帽子と夏の思い出です。「おかしを やいたから あそびに いらっしやい。」隣町のおばさんからの電話です。麦わら帽子をかぶっていこうとしたるこに、「はやく、そんな ぼうし めいで。」「それ かぶっていくな、つれて いかないわ。」もう あきなのに、なつの ぼうし なんか おかしいわ。」矢継ぎ早にそう言ってせかせる姉に、るこは、「まだ なつよ」と答えます。「もう すずしいでしょ。」姉のその声に反発するかのように、るこは「ぼうしを うんと ふかく ひっぱりおろしました。むぎわらの においがします。ひなたの におい です。」帽子の中に奇妙な安心感が生まれます。帽子という外なるものが、なじむことによって内なるものに、そこから生まれる安心感です。



るこがそこで見たもの、帽子が見せてくれたものは夏の思い出です。「あ、そうだ。みんなで うみに あそびに きて いたんだっけ。」お姉さんがるこの帽子を高く放り上げます。「つかまえて、だれか つかまえて！」沖の方へ出て行った帽子が、「ぼーん、ぼーん、てから てへ なげられて、かえってきます。」「わたしの ぼうし！」そう言ってるるこは帽子をしっかりとつかみます。海が消えます。るこが帽子をぬぐと、つばの縫い目が破れています。「そこから なつは でて いって しまいました。」出ていってしまったのではない、るこの中に思い出としてしまい込まれたのです。

「ぼうし」瀬川康男作・絵／福音館書店

「わたしのぼうし」さのようこ作・絵／ポプラ社

「むぎわらぼうし」竹下文子作・いせひでこ絵／講談社

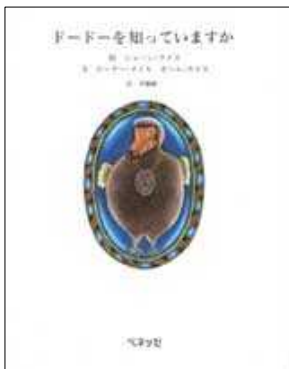
（英語教育講座）

■ 今は無き動物たちに思いを寄せて...

菅原 淳

この絵本との出会いは、私が20代だった頃、ストレートなタイトルと表紙の絵に惹かれ、思わず手に取ったことでした。本を開いて見てみると、美しい動物の挿絵とその動物についての説明が書いてあります。30分もあれば、一気に読み終えることができる分量です。

それでは、この絵本の最初の部分を少しだけ紹介します。



ドードー 学名：ラプス ククラートゥス

「むかし、インド洋のモーリシャス島に、ドードーという、七面鳥よりすこし大きな鳥がすんでいました。ドードーはへんな鳥でした。太りすぎていたために、飛べなかったし、走ろうとすると、おしりが地面にぶつかってしまうのです。最高速度を出しても、よちよちかけまわるだけでした。もしかすると、自然は、ドードーのつくりかたをまちがえたのかもしれない。」

このように、文章も平易で、挿絵があるのでとても読みやすい絵本です。

実は、これは、美しすぎたために、あるいは、ちょっとおおらかすぎたために絶滅してしまった楽園の動物たちを取り上げた絵本なのです。

他には登場順に、ミイロコンゴウ、クアッガ、オオウミガラスなど、全部で14種類の絶滅した動物たちについて、どんな生活をしていて、なぜ絶滅したのか（ほとんどの場合、人間が原因になっています）が分かりやすく書いてあります。名前だけでは想像がつかない動物でも、挿絵があることで容易にイメージすることができます。その絵を見ると、伝説上のおとぎ話に出てくるような動物たちで、とても興味がわきます。

ちなみに、ドードーは『不思議の国のアリス』の中に登場します。この本が出版されたのは1865年ですが、この時すでにドードーは絶滅していました。ドードーは1598年にオランダ人により発見されましたが、絶滅するまでに100年もかかりませんでした。

さらに、もっと身近なところでは、子供たちに人気のあるポケットモンスターのキャラクターとして、その名もドードーで登場します。ただし、こちらのドードーは、絶滅したドードーとは異なり、足がとても速いポケモンとして描かれています。

他にも、ドラゴンクエスト、ドラえもん、アンパンマンの話の中にもドードーをモデルとしたキャラクターが出てきます。興味のある方は調べてみてください。

絶滅した動物たちは目立つ存在だったがために、人間に捕獲され続け、種が絶えてしまいました。しかし、挿絵のように色鮮やかでとてもインパクトがあるからこそ、現代においてもアニメのキャラクターとして、子供たちに愛されています。

そんな子供たちにぜひ読んでもらいたい一冊です。きっと素敵な発見があるはずです。

「ドードーを知っていますか」

ショーン・ライス・絵／ピーター・メイル、ポール・ライス・文／斉藤健一・訳／ベネッセ

(特別支援学校教諭)

■ いつまでも一緒にいたいと思うすばらしさを教えてくれるこの一冊

ガス・ウィリアムズ文・絵 / まつおかきょうこ訳『しろいうさぎとくろいうさぎ』（福音館書店）

後藤 姫奈

白いうさぎと黒いうさぎが森の中に棲んでいます。二ひきは毎日、楽しく遊びます。いつものように、馬とびをします。ところが、しばらくすると、黒いうさぎは座り込み、悲しそうな顔をするのです。「どうかしたの？」白いうさぎがそう聞くと、「うん、ぼく、ちょっと かんがえてたんだ」と答えます。かくれんぼをしても、どんぐり探しをしても、かけっこをしても、ひなびく跳びをしても、クローバーくぐりをしても、その度に黒いうさぎは座り込み、悲しそうな顔をして言うのです。「うん、ぼく、ちょっと かんがえてたんだ」

「さっきから、なにを そんなに かんがえてるの？」白いうさぎの問い掛けに、黒いうさぎは答えます。「ぼく、ねがいごとを しているんだよ」「ねがいごとって？」との問い掛けに、黒いうさぎは、その願いごとを口にするのです。「いつも いつも、いつまでも、きみといっしょに いられますようにってさ」

白いうさぎは手を差し伸べます。黒いうさぎがやわらかなその手をそっとにぎります。それから二匹は、たんぼの花を摘み、耳にさします。幸せそうな二ひきの様子を見に、他のうさぎや森の動物たちが集まってきます。月明かりの下、皆で結婚式のダンスを踊るのです。

二ひきのうさぎは、今日も一緒に楽しく遊び、暮らしています。黒いうさぎが、悲しそうな顔をすることはもうありません。

この絵本では、白と黒だけと思われるほどに色が使われていません。それでいて、悲しげな黒いうさぎの顔、黒いうさぎの願いごとを聞いた白いうさぎの驚いた顔、「ねえ、そのこと、もっと いっしょうけんめい ねがってごらんさいよ」と白いうさぎに言われ、心を籠めて「これからさき、いつも きみといっしょに いられますように！」と言う黒いうさぎ、すべてが繊細に生き活きと描かれています。

黒いうさぎが悲しそうな顔をするのはどうしてなのか、小さい頃不思議に思いましたが、いま読むと、黒いうさぎの気持ちが、白いうさぎの気持ちがよくわかります。人を好きになること、いつまでも一緒にいたいと思うことのすばらしさが、シンプルでありながら豊かに描き出されているのです。読み終わると、ほのぼのとした幸せな気持ちになります。いつか自分の子どもに読んでやり、黒いうさぎの切ない気持ちがわかる日がくるのを見守りたいと思う、私のお気に入りの一冊です。

（英語コミュニケーションコース4年）

■ 新刊紹介

いまいあやの作・絵『くつやのねこ』（BL出版）

客がめったに来ない、店じまい寸前の靴やに飼われているねこがいます。ねこがご主人様に言います、「よい かんがえがあります。ひとつ わたしに、いちばんよい 革で 長ぐつを つくってください。それを はいて 注文を もらってきますよ。」「よいかんがえがあります」とは、知恵があること、知恵があるとは、先が見え、先回りができること。「注文」が、相手に「注文」を出し、思い通りにコントロールする意味をも含むのはそのためです。

ねこは魔物の城へと向かいます。むき出しの魔物の足とぴったりの赤い靴をはいたねこの足の違いは歴然としています。そう見えるようねこが立てた計算です。魔物は大きなもの、小さなもの、ねこの注文通りに変身します。その度に魔物の足を測り、一足、また一足と、靴やに注文を入れるのです。

靴の代金を払ってもらえないことから、「また よい かんがえを おもいついた」ねこは、小さな小さな靴を作ってもらい、再び魔物の城に向かいます。「いくら あなたでも これが はけるような小さなものに 変身するのは むりでしょう」、そう言って魔物を挑発するのです。挑発に乗った魔物はねずみに変身、待ちかまえていたねこはぺろりと食べてしまいます。ここでも見えているのは先回りの知恵です。魔物を恐れて近づくことさえしなかった村人が、魔物の城を店にした靴やに次々にやってきます。店先に並んでいるのは、とてつもなく大きな靴から小さな小さな靴。その靴が何なのかを知っているのはねこ靴やです。あるいは靴やさえ知らない、知っているのはねこだけかもしれません。

ペローの「長靴をはいたねこ」を基にした絵本です。死んだふりをしてつかまえたうさぎをカラバ侯爵からのものと王の城に持参する、王の行列が通るのを見越して、ご主人様に溺れたふりをさせる、そうしてご主人様をカラバ侯爵に仕立て上げ、王の娘と結婚させる筋立ては削られています。ここにあるのは、人食い鬼を挑発し、小さなものに変身させて食べてしまう部分だけ。靴をはいた靴やのねこが、靴によって魔物をやつつけ、ご主人様に尽くす、すべてが靴に、靴をめぐる物語に変えられていることになります。

（藤田 博）



発行：宮城教育大学附属図書館